



多井の如く一日の間に書中と同様の事
ありては、文章の正しき可なりとす。其の
志作さるる者、其の志を以て持て、天
風法之運、歩行する。今日、病の解る、世に
於て、又、時、一傑人あり、其の志を
持て、一日、病の解る、世に、
文、其の志を以て、持て、天
風法之運、歩行する。今日、病の解る、世に
於て、又、時、一傑人あり、其の志を
持て、一日、病の解る、世に、

其の如く、動行の者、其の志を以て、持て、天
風法之運、歩行する。今日、病の解る、世に
於て、又、時、一傑人あり、其の志を
持て、一日、病の解る、世に、
文、其の志を以て、持て、天
風法之運、歩行する。今日、病の解る、世に
於て、又、時、一傑人あり、其の志を
持て、一日、病の解る、世に、

素心位素心位
巴城...
素心位素心位
巴城...
素心位素心位
巴城...

素心位素心位

素心位素心位

甲寅の解を言ひしに
其かれか...
二大...
自...
推...
東海...

福と云く是を山信少陸死吟亦継ぎ
らるる諸流の祝文を探りて其編
久き来あるものな昔の古人の善と美
ふら書けしと壽世の御祝の語を
としし目にしたあらう牛年御序し様
充り近年御祝の業の盛りの御序
あふらるる御祝の文を御集りて
華の筆力の御新にかわりの文を
其人の御序の御祝の文を御集りて

お見れ候るるを御集りての序
は御集りて四本あるに
祝の文の御祝の文を御集りて
後、さうな御祝の文を御集りて
久しき御祝の文を御集りて
さうな御祝の文を御集りて

新編俳諧文集上

凡例



蕪菴蟹守著

人の撰る

一大和文章伐れ多ありおほく申ふ俳諧の
 一格と貞徳翁の宮られしと雪蕉翁も亦一家
 の風を身し門人ふ二三部の撰ありそれら中
 にも風俗文選もいともよく人の撰るものあり
 他僅に諸集せりみたりといへどもをむらむを
 俳諧文集と号するに由来して著すもの多し
 おのれ嚮くおもひきつるやみして西京の如
 握歴の如くは諸翁ふと求て数章を志すべし

上凡例

是るは是を丸く今郊不編あるんあらた
 さふりまふふさふへーあうあれと
 ちく蠹乃巢とあー果人もほひあえん又
 類不増補して文選よりいあふ古人を緝
 録し當時の作者をも書載しれをわう
 一編のやうみとあぬちあ李
 一此編古今の人を霄塊して卯年曆の次序を
 ころんとくとも文章の體裁分科をあう
 ち諸神ひつゝふゆる物あうゆえあ
 一世度別不発句撰上本の折う敢て一雙ある
 ちのあもあうまといへ編も亦控あ

ちむへーして例の書房の心ひさしたひうさ
 ねて五月あ川の流さ源さハえもあふ
 ち中流ぬ流さのいさちあまをさ
 ちのちあ僅平硯の海ふ入られ波あせを
 ち乃折とらさかもあんか

新編俳諧文集上

目錄

駒墳集序
高館懷古
桃李集序
丹布多比鳥序
虎画讚
新小菟序
何休集序

^京 圃更
^{江戸} 蓼太
^京 燕村
^{カヒ} 葛里
^京 重厚
^{江戸} 巢北
^{江戸} 成美

姨捨山賦
二十歌仙序
芭蕉翁真跡序
其唐松後序
茶摺小木序
十時庵再勸進帖序
無名鳥題言

^{イセ} 樗良
^{マシ} 曉臺
^{マシ} 士朗
^{カヒ} 敲水
^{ハツ} 乙二
^{江戸} 道彦
葛里

新編俳諧文集下

目錄

端津久李
瓢藏銘
犬坊主傳
送友人西遊序
蟬辭
息杖辨
毛蓼說
二十歌仙序

^京 月居
^京 雪雄
^{三ノ} 卓池
^{カヒ} 蟹守
^{セツ} 桐栖
^{江戸} 豪山
^{アキ} 路宅
^{カキ} 耒耜

炭說
茶隱書画帖序
芙蓉扇賦
其夕女句帖序
豆太鼓頌
紀行
名月辭
書画帖跋

^{イセ} 椿堂
^{マシ} 篤老
^{マシ} 瀾古
^{アキ} 玄蛙
^{江戸} 寥松
^{アキ} 鳳郎
^{アキ} 圭雨
魯隱

下凡例

三

俳諧古今説	^{イセ} 井里	雜文	^{カヒ} 泥中
秋月序詞	^{江戸} 鶯笠	楨小庭記	寥松
雨中此詞	禾黍	紀行	蟹守
夕顔頌	少翁	蟬説	^{カヒ} 一飛
朝起論	^{カヒ} 真貫	國見平記	^{カヒ} 真洞
送鷹園主東遊序	^{カヒ} 靜管	小築記	^{江戸} 對山
自誠	^{江戸} 護物	折筭銘	寥松
住吉御田記	鶯笠		
憎鳥辭	蟹守		

新編俳諧文集上

菴庵蟹守著

駒墳集序

蘭更

其のかみとせ銭の翁甲斐り根み杖をめぐらしむさ
 矣此氷とけそめしより善も日あまり月ふらり
 つり約の妻ふたふゆゑの同乃やとりこころ
 旅の哀ぬく暫時百景の旁はむい古人ととむ
 腸をそとさ山里のまれ後の宿ま鬼の皮紙松
 つくれと童子をも慰め終ひあるよ〜風流さ海〜
 ある中子馬蹄る玉のよりととるあさめ〜あ〜
 されハかの言孫を碑ふと〜知子載不汚の正風を

上

一

あふき遠近の好士の匂くをゆく覚て駒墳集を
選ん身を著る三車主人の顔きをぬくみて
老懶おもひ時をゆくき十う一をあらに嚙抹そ家の

姨捨山賦

樗良

更科の月めくくある秋八月八日の叔姨捨山小堂ま
鏡臺山を冠るまけのむくふたてり筑摩川花やうに
簾をめぐり雲井のうく名のくくく水上の月と甲く
田毎の糸おきとひく山の松風ふあくくわくり宝く池
桂く池更科川まく流稲荷山八幡の里川中流を
おるおまら孫ふ見えかくは吹風精神をせめま

あふき見くもの目あうくくくあそれあり粥をまきと音を
あふき志くくく石上めんをまきと

高館懐古

蓼太

最後の戎衣一ふあきほり平泉のまらんあるをるるに
大後小車の行あをぬるあふた右の歌くを軒むひ
あふきあふきあふきあふきあふきあふきあふきあふき
人も顔あふきあふきあふきあふきあふきあふきあふき
ものあふきあふきあふきあふきあふきあふきあふき
かさねあふきあふき柳のあふきあふきあふきあふき
たやまに風くあふきあふきあふきあふきあふきあふき

上

二

かこやく

裳をかこく程四方は風色をひらき、衣の霞は白く
 かにきりぎりすものをもとに和名或はつ離情をつくし
 衣川はたかきりぎりすを流るるをきかれと源のまをり
 渡をそくくぬり流るるも結をて厚の山はありれり
 湧白山をきかれわけ海のをたけり山室根山たそ
 志福山を花の雲をひえいふせのまをり八時をたけいふ
 せ鳴ありいそめの里をたき志をりみ金鷄山は曉を
 報して対するのほくみを和するり似たりと毛越寺
 の堂塔四十余様房五百余宇中尊寺金色堂經
 堂吉祥堂ありしる神社佛岡山く日小映一月小
 かなくかえんつくむもの柵を義士和泉三郎の紫ふ

して碧流岸をうらふ上川小流て言報ふりあり
 源廷尉千かいつきたる屋敷くく衆星れ水底を
 遠るる如くあふま立かきふまつまいて秀衡一門の榮
 耀更ふいふくもあはれはをあらんまらぬを裂
 麟をゆする目をよろこぶむるあは炎乙乃梅花
 去冬のさくもまてこのとまいたおられしとよを厚ふ
 鶴と九阜おちるるも子秋を祖飛八十符の浦小
 万代をこころきしもたし今も

山そのえ川ありれりあまの風

二十歌仙序

曉臺

吳道玄龍を画て鱗甲うきき忽烟霧起て雨を
くくは烟霧龍を生せは龍烟霧をむくへをたは云
何そ龍を画ん龍も又其人を好てあるもの一龍
奇をあしひより妙をふは奇なるも妙あり其龍天
のほろうぬを去龍といふ桃青二十哥仙ハ画龍あり
画龍ありそのら去龍あり冬の日五哥仙ハ画龍あり
世上今画龍を身まきて何きのまあり去龍といふ
免心

桃李集序

藤村

以の能くあふりぬき人四時曰まきりたふ仙秋きせぬ
友をそのとりぬき人徳をたふあふんといふを人割て
曰世哥仙ありそやく年月を強きおそくは流り
おくれうん手袋て曰俳諧の活達あるや実ふ流り
有る流りあしたくハ一圓郭ふ流りて人を追ふて
走るうきし先きものたて後れたるもの追ふ
手似たり流りの先後何せぬてまうのへらんや只
くおのれ胸懐をうきし出てらるるあふの志ふ
あして翌日又たあふり能くあり題しそをて
上

四

15
花あれをまきしかして貝ふとにまふ年感ある
るやわれいおゆけあくも天骨あくもらるる家
危ふ流ゆるわさありま繁うれの尾張の士朗の
那多祢のあふ小雀如雷をそめて流りの危を
わくわくこれの巻張を時々の巻の材面をそま
て不易の心を流出せりさて其面をそまの巻を
ある危をそまめらるる巻を近人へこれあふ
繁のあてらるる巻を境をれあふる巻を
おのらるる巻を境をれあふる巻を
乃巻を境をれあふる巻を境をれあふる巻を
乃巻を境をれあふる巻を境をれあふる巻を

如良希て帰半手と流るもの

其唐松集後序

鼓氷

人各名利の爲年流るる流るる流るる流るる流るる
勢と勢と老の流るる流るる流るる流るる流るる
遠き庵のあふるる流るる流るる流るる流るる
求るるあふるる又利を貪るるあふるる流るる流るる
いへきあふるるあふるるあふるるあふるるあふるる
らねるるあふるるあふるるあふるるあふるるあふるる
の下流りま志をめてぬ人らあふるるあふるるあふるる
志あふるるあふるるあふるるあふるるあふるる

上

六

虎畫讚

重厚

虎ハ五百歳に齡ありて山獸の長なる由あり
武士に箭先をおそはるるも其掌たふさし
されとなましく豹子を喰ふも其忽碎とあれど
をもて豹子に盧の酒とらふめを彼の野に
馬碎木のあわするも似されえぬも其
くまはれて終小地獄の底に夢をさされ赤
鬼の情鼻をさうくくくはるるを
む

茶摺小木集序

乙二

そも爰は空よりきものわたりし 東風我晴窓
夢載て吹落せ江湖白鳥の色とつくりし 碎仙も
天曆の帝の滋野内侍うきよふき人やつくんとは
名も枯聖をうけゆる翁のわたりも花も死人越
人々も池塘喜草小惠連と思ひせし 名詩も
呂翁の囊中の枕とよりて 荻梁と炊く 写小榮連と見
しも 担里紀五十夢のうらみ 珠と鼓 手 撫ふも
と世縁葉のわけの 園鶏野の 雲も爰ありし
きものわたりし 爰子 故 投小 瀬田の 浮橋をうけ

そこらとちよひありきて岡の堂佛幻庵の古き松を
清みわさし一の僧を几母憑りて嗒焉とておさしぬ
羨子やをらさしよとて俳諧の一たすを何ふまは
曰訪より八梅ありぬも茶すり小本公と待事梅よりぬ
おちぬとも世句を函執雅致新奇をふらぬりぬの茶
まり小本をさしく深く工紫のたまけとせよ中をさ
かき消しうせぬ羨も又片ぬぬれ江淹の彩色を
ゆてかの文藻まきくさうんあさるぬく芝のまをの
筵子猿とあしう盧仝の七碗腋下平 清風を
生し曉臺の露ゆくの茶一盞の淡生涯雅の人
もくふめてさうん世集やあふ海の川浪舟とぬ

新小筵序

巢兆

たきてをを照し羨子ありしきふまのぬ山乃
豈志のさうん然やも

おのむ厚のおぬく居るもの陰ふおひししとせ
まもひしひあしあしあしあしあしあしあしあし
くを侍り浪ぬおしぬを存あしあしあしあしあし
をしし強ししししもの穀不是え侍りししその
を舞とる何まのるしとやあわしん川のたさありとて
坂東ちきりしとやあ何れ業何のあしあしあしあし
らあしと何まの年あしとる良園とさむししと

上

八

いふふと成つくりお富地の面自平値へ侍りやんとて
東都旅宿乃什物お脚一傳ふよりそはちそはち
家のを御手あつてそのものを侍つて口を續小莖踏
小莖のやうくわつてその根合をわをせぬあつて
侍りしよ季よりくはひのを頼取に志してその心
しつちもおはつりおん被室お小敷を拍まといひ侍
八五の愛おおつりいもを侍りんよりも浄名居士の
方丈お疲たつて一あつてその心ひの莖めを新さ
むしつちをかを侍侍りてあつてその心わつておれ梅のたて
柳のぬいしてあつてその心わつておれその心
侍りしつちもあつて侍りあつて其良冠者つてその心

たふと糸撰者を郎地念あつてゆりあつてあつて江戸
根えの因縁ゆりあつてせつてその心あつて其那濱台

十時庵再建勸進帖序

道彦

羽根つらむおれをさつてあつてその心あつて其那濱台
さつてあつて其那濱台をさつてあつてその心あつて
かつてあつて其那濱台をさつてあつてその心あつて
其性あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
その心あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
幻住老人の心をたつてあつてあつてあつてあつてあつて
さつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

上

九

書るおもくけあてあつも紙物の文字をもちひあう
例のふるみみ落さる焼曲あるへいあれ平
それ奇の作者のこころもをつみ入まてこれ清濁
影長のとりこみぬころも嵐巻るものくちあころ
たこの中ふおもひこぞんころいままじいまはあ
ころりもわれと囊を括る平ころめあしころや
ころあまぬまそころころはしを志ころ
唇をつくみゆる

無名鳥集題言

葛里

春の日のあけ木の百をころり秋の月のあけ
にやころ其美景みむくそあ代もあまあころ
ころふおのつころ天権ありころねさくとまのね
自適守られおひのむころあり不ころ山あて
ものころわししあけけしきあまのあまあひあて人
のあまもていひあまはへきものくま秋を交なり
夏の日は照りころころあも冬あああああああ
只山をえられ世の中あ困苦をもあまあああ
ころさ幸もあてあんあまあまあまあまあま
あまあり東坡居士乃あああああああああ
あまて百年の樂みあてあまあまあまあまあま

上

十一

とそちりて 権の本あるとあるをきかむとて 権の
うらふ思ふとちかむとて 多き蓬もあはれ 権ひたるん
ち実ふ玉の珠も ちかむとて ちかむとて ちかむとて
三つあり 鶴の足も 鴨のあし 籠しよとて や
あの名形し人の心は名形し ちかむとて ちかむとて
只とて ちかむとて 無何有の交ぬ ちかむとて

五梅園文庫

